

元治元年（1864）『斉藤来由』における「浄庵沼」

2025 年 5 月 24 日 秦野 秀明

本論の要旨

白扇 元治元年（1864）8 月 23 日『斉藤来由』（解説者 鈴木 秀俊（1991））（注 1）

（以下は、『斉藤来由』（注 1）と記載）

における「浄庵沼」に関する記載箇所への説明には、歴代の論考の公表者によって変化が見られる。

本稿では、「浄庵沼」に関する記載箇所への「説明の変化」や、その「背景」を考察した結果、「浄庵沼」とは、越谷市荻島地区に存在した「広大な沼沢地」として解釈することが可能である」との「仮説」を、改めて発表した。

◎ はじめに

①『斉藤来由』（注 1）

における「浄庵沼」に関する記載箇所を以下に記載する。

①経路「浄庵沼」→「屋舗」

「[前略]城主太田十郎氏房は実父北條氏政に属（原文は『励』）シ、天正十八庚（原文は『甲』）寅六月小田原二出張、父氏政軍利有らずして父子生害、兄七郎氏直ト諸共紀州高野山二登り、同じく冬天野に下り遁居す。同時に氏房の内室、夫の戦い不安に思い、嫡五歳の男岩月丸ヲ抱き野嶋山地蔵尊へ夫の勝利祈誓セシニ、地蔵の両眼ヨリ涙の溢レルヲ見て勝利無事ヲ悟り、岩月丸は斉藤太郎光高ヲ頼り秣領西新井へ落つ。其の身は地蔵前浄菴沼へ投身、其の遺骸此の屋舗へ流着ス。是ヲ揚げ葬して椿ヲ印となす。依って今に至る迄、椿割り塚と称す[後略]」

（太字・下線は筆者による加筆）

1. 『斉藤来由』（注 1）における「浄庵沼」に関する記載箇所への説明の変化

②大久保 知子（1985）（注 2）
における「浄庵沼」に関する記載箇所を以下に記載する。

②経路「浄庵沼」→「屋鋪」
「[前略]その身は地蔵尊の浄庵沼に投身 その遺骸はこの屋敷に流れ着く[後略]」
（太字・下線は筆者による加筆）

③（2005, 12, 10 建立）「「椿割塚」西側の石碑」（注 3）
における「浄庵沼」に関する記載箇所を以下に記載する。

③経路「浄庵沼」→「浄庵堀」→「屋鋪」

「[前略]地蔵尊の前の池に身を投げ果てました。その遺骸は沼から流れ出る浄庵堀を下って、西新井の名主斉藤家の西側に流れ着きました[後略]」
（太字・下線は筆者による加筆）

④田村 のぶ子（2006）（注 4）
における「浄庵沼」に関する記載箇所を以下に記載する。

④経路「浄庵沼」→「浄庵堀」→「屋鋪」
「[前略]浄山寺前の「浄庵沼」に身を投げた。[中略] 浄庵沼に身を投じた内室の遺骸は、沼から流れ出る浄庵堀を下って、ここ西新井村の斎藤家の西脇に流れ着いた[後略]」
（太字・下線は筆者による加筆）

◎筆者における「浄庵沼」に関する記載経緯を以下に説明する。

筆者は 2015 年以前より、

①『斎藤来由』（注 1）

A・越谷市立図書館蔵「絵図の部 資料番号 20 明治期 蒲生・大戸間の河川と道路絵図」

（解読者 加藤 幸一・監修者 鈴木 秀俊（年未詳））（注 5）

の「2 点の資料」を、「NP0 法人越谷市郷土研究会」の加藤 幸一氏から譲り受けており、その記載内容を知っていた。

2015 年 7 月 12 日に開催された「NP0 法人越谷市郷土研究会」のクラブ活動である「河川史研究倶楽部（現・「地誌研究倶楽部」）」の「巡検」の際に、旧・西新井村の T 家（屋号は「浄庵」）の東側の道路が、「昔は「浄庵堀」と云う水路であった」との言い伝えを、「聞き取り調査」で確認した。

約 3 年後の 2018 年 5 月 27 日に開催された「NP0 法人越谷市郷土研究会」のイベントの際、

⑤「第 490 回 史跡めぐり 岩槻区南東部とベトナム寺院」の配布資料（注 6）

において、2015 年 7 月 12 日の「聞き取り調査」における「言い伝え」の内容から考察した結果として、「浄庵沼」について以下のように記載し公表した。

⑤経路「浄庵沼≡（nearly equal）広大な沼沢地」→「屋舗」

「[前略]「白扇著 元治元年八月 斎藤来由」では、野島の地蔵尊（浄山寺）の前の「浄庵沼」に身投げした後の遺骸が旧 西新井村の旧 斎藤家屋敷に流れ着いたことも書かれています。つまり、旧 野島村の野島の地蔵尊（浄山寺）の前から旧 西新井村の旧 斎藤家屋敷にかけて、「広大な沼沢地」が存在していたと解釈が可能なことが書かれています[後略]」

（太字・下線は筆者による加筆）

約 4 年後（約 7 年後）の 2022 年 5 月 3 日には、

⑥秦野 秀明（2022a）「明治期の「浄庵用水（堀）」の流路」（注 7）

において、

A・越谷市立図書館蔵「絵図の部 資料番号 20 明治期 蒲生・大戸間の河川と道路絵図」

（解説者 加藤 幸一・監修者 鈴木 秀俊（年未詳））（注 5）
に記載された明治期の「浄庵用水（堀）」の流路の「定義」（注 8）を根拠とした上で、
B・「今昔マップ on the web」（注 9）
を利用して、現在の越谷市荻島地区における明治期の「浄庵用水（堀）」の流路を復元させ公表した。
また、「浄庵沼」について以下のように記載し公表した。

⑥経路「浄庵沼≡（nearly equal）広大な沼沢地」→「屋鋪」
「[前略]この記載は、旧野島村の野島の地蔵尊（浄山寺）の前から旧西新井村の旧斎藤家屋敷付近にかけて「広大な沼沢地」が存在していたと解釈することが可能である」[後略]」
（太字・下線は筆者による加筆）

同年 11 月 16 日にも、

⑦秦野 秀明(2022b)「浄庵用水（堀）」（令和 4 年度 第 53 回 越谷市民文化祭）（注 10）
において、秦野 秀明（2022a）（注 7）と同様の内容を公表した。
また、「浄庵沼」について以下のように記載し公表した。

⑦経路「浄庵沼≡（nearly equal）広大な沼沢地」→「屋鋪」
「[前略]この伝説の背景として、天正十八年（一五九〇）当時においては、旧野島村の野嶋山地蔵尊（浄山寺）の前（南）から旧西新井村の旧斎藤家屋敷付近にかけて、「広大な沼沢地」が存在していたと解釈することが可能である」[後略]」
（太字・下線は筆者による加筆）

約 1 年後（約 8 年後）の 2023 年 9 月 21 日には、

◎秦野 秀明（2023）明治期の「浄庵用水（堀）」と「三ヶ村用水路」の流路の復元」（注 11）
において、
A・越谷市立図書館蔵「絵図の部 資料番号 20 明治期 蒲生・大戸間の河川と道路絵図」

（解読者 加藤 幸一・監修者 鈴木 秀俊（年未詳））（注 5）

に記載された

明治期の「浄庵用水（堀）」の流路の「定義」（注 8）

及び「三ヶ村用水路」の流路の「定義」（注 12）

を根拠とした上で、

C・「農研機構農業環境研究部門 歴史的農業環境閲覧システム」（注 13）

を利用して、現在のさいたま市岩槻区末田及び越谷市荻島地区における「浄庵用水（堀）」と「三ヶ村用水路」の流路を復元させて公表した。

2. 加藤 幸一（2025）「野島の浄山寺前の浄庵沼と浄庵用水」『荻島地区の歴史』における問題点

加藤 幸一（2025）（注 14）における「野島の浄山寺前の浄庵沼と浄庵用水」（注 14）を以下に記載する。

⑧経路「浄庵沼」→「原・浄庵堀」→「屋鋪」

「[前略]古地図には、「浄アンセキ」（浄庵堰）の文字がみられる。浄庵沼や椿割塚と係わりのある堰と思われる。浄庵沼から末田用水の浄庵堰までの浄庵堀の流路はわかっていないが、遺骸が現在の椿割塚のある田村家に着いたルートについて次のような仮説があげられる。

もしも浄庵沼の近くに浄庵堀がもともとあったとの前提で、浄庵堀を利用して末田用水として作られたなら、浄庵沼から流れ出て浄庵堀に入り、おおよそ末田用水の流路を使ってこの浄庵堰（今の越谷ホームの東側あたり・9頁の地図参照（注 15））あたりまで来たとの可能性がある。そうであるならば浄庵堀の名称は、浄庵堰の上流の末田用水も古くは別名「浄庵堀」と呼ばれたはずである。そして浄庵堰からさらに進んで西新井村に入り、椿割塚のあるかつての斎藤家にたどり着いたのであろう。9頁の地図では末田用水の上流から浄庵堰までのルートを → で示してみた。

西新井の椿割塚のそばに、屋号が「じょうあん」と呼ばれる高橋家がある。高橋家の東側沿いの道には「じょうあん」と呼ばれた堀があったと伝わる。事実ならば浄庵堀から分かれてこのルートを進んで斎藤家に流れ着いたのであろうか[後略]

((注) は筆者による加筆)

①『齊藤来由』に記載されていない内容を仮説とする前提には問題がある

『齊藤来由』(注1)には、以下のように記載されている。

「其の身は地蔵前浄庵沼へ投身、其の遺骸此の屋舗へ流着ス」
(太字・下線は筆者による加筆)

つまり、「地蔵前「浄庵沼」から「用水を経て」此の「屋舗」へ流着」とは「記載されていない」。
ゆえに、「用水を経て」という記載されていない内容を仮説とする前提には問題がある。
つまり、経路としての「浄庵沼」→「原・浄庵堰」→「屋舗」という仮説には問題がある。

②「浄山寺」の南側に存在した「御目洗の池」を「浄庵沼」と推定する前提には問題がある

「浄山寺」の南側にかつて存在した「池」の名称を記載した史料として、
「嘉永6年(1853)「武州野嶋山之図」(東京都立中央図書館 所蔵)」(注16)
があり、その史料には「池」の名称として「御目洗の池」との記載がある。

管見の限り、「池」の名称を記載した史料として、
「嘉永6年(1853)「武州野嶋山之図」(東京都立中央図書館 所蔵)」(注16)
が「初見」であり、残念ながらこの史料以外には現在の所、発見されていない。

その上で、「浄山寺」の「前」であるという点以外には論拠が見当たらないにも関わらず、「御目洗の池」を地蔵前「浄庵沼」と推定する前提には問題がある。

③「浄庵沼」と「浄庵堰」の上流部である「末田用水」が接続していたとする前提には問題がある

A・越谷市立図書館蔵「絵図の部 資料番号20 明治期 蒲生・大戸間の河川と道路絵図」

(解説者 加藤 幸一・監修者 鈴木 秀俊)(注5)

D・明治十四年(1881)測量「迅速測図」(注17)

において、「浄庵堰」の上流部である「末田用水」と、「浄庵沼」として推定した「御目洗の池」は、「用水や排水路などの水路」として「接続」していない。

つまり、管見の限り現存する「絵図」や「地図」において記載されていない情報を、無自覚に設定する前提には問題がある。

次に、「河道や旧河道など」が自然に形成された可能性も考慮して考察すれば、「浄山寺」の南側にかつて存在した「御目洗の池」を地蔵前「浄庵沼」と推定し前提とした場合、「浄庵堰」の上流部である「末田用水」と、「用水や排水路などの水路」または「河道や旧河道など」が「接続」するためには、最短距離で「北北東→南南西」へ「約 293m」の幅が必要となり、国土地理院「治水地形分類図」（注 18）によれば、その「約 293m」の幅の全てが、「浄山寺」の北側を河道とする「元荒川（近世以前の「利根川本流」）」の形成した「自然堤防」である。

ちなみに、国土地理院「治水地形分類図」（注 18）によれば、「浄山寺」の南側にかつて存在した「御目洗の池」は、「元荒川」の旧河道の上に自然に形成（「落堀」など）、または人工的に形成された「池」である。

さらに、「元荒川」の河道は現在「西北西→西南西」へ流下し、「元荒川」の旧河道は過去に「西南西→東北東→西北西」へ流下していたため、「北北東→南南西」へ「約 293m」の幅を水勢で自然に河道が形成された過去が存在したとは考えにくく、平社 定夫（2024）（注 19）によれば、「元荒川」右岸のさいたま市岩槻区末田付近より「クレバススプレー」及び複数の「クレバスレビー」が確認可能で、越谷市野島付近の「方向性」は、「元荒川」の河道に沿った「西北西→西南西」である。

つまり、「浄庵沼」と「浄庵堰」の上流部である「末田用水」が接続していたとする前提には問題がある。

④「荻島地区の用水路」の本格的な開発の開始時期の設定に対する方法及び前提には問題がある

「先行研究」（注 20）によれば、越谷市荻島地区の用水路の本格的な開発の開始時期は、慶長年間（1596～1615）に元荒川に設置された「末田・須賀堰」及び「末田・須賀溜井」に始まるとされ、該当する用水路の名称は「末田用水」である。

今回公表された加藤 幸一（2025）（注 14）では、「荻島地区の用水路」の本格的な開発の開始時期が、慶長年間（1596～1615）以前に遡る事が「前提」として設定されており、その「新」解釈を説明するための論拠となる新出史料または新出遺物が「未」提示の上で発表された。

以上のような解釈及び発表は「反証可能性」を欠き、問題点を含む。

今後の研究の進展によっては、「先行研究」（注 20）を覆す「新」解釈の発表が「反証可能性」の上で行われて、「荻島地区の用水路」の本格的な開発の開始時期が、慶長年間（1596～1615）以前に遡る事が実証される可能性は勿論充分にあり得る。

しかしながら、浄山寺の南側付近を流れる「末田用水」の現在の「流路幅」でさえ約 4m であり、慶長年間（1596～1615）以前に存在したと仮定する「用水路」の「流路幅」は 4m を遥かに下回ると想定され、その時代の「用水路」には、近世において用水管理を行った「藻刈組合」も存在せず、現代において用水管理を行う「土地改良区」も当然存在しない中で、

「浄庵沼」→「原・浄庵堀」→「屋鋪」

という直線距離でも「約 3,41km」もある行程を、障害なく遺骸が流着する「仮説」に関しては、想定することすら難しい。

つまり、荻島地区の用水路の本格的な開発の開始時期の設定に対する方法及び前提には問題がある。

3. 筆者の推定した経路「浄庵沼≡（nearly equal）広大な沼沢地」→「屋鋪」

筆者は既に、

⑤秦野 秀明（2018）「第 490 回 史跡めぐり 岩槻区南東部とベトナム寺院」の配布資料（注 6）

⑥秦野 秀明（2022a）「明治期の「浄庵用水（堀）」の流路」（注 7）

⑦秦野 秀明（2022b）「浄庵用水（堀）」（令和 4 年度 第 53 回 越谷市民文化祭）（注 10）

において、

⑤⑥⑦経路「浄庵沼≡（nearly equal）広大な沼沢地」→「屋鋪」

として推定し、その可能性を発表してきたが、該当する 3 回に及ぶ発表において、いずれも具体的には論拠を示さなかった理由は単純で明快である。

なぜなら、出典である『齊藤来由』（注 1）に、

①経路「浄庵沼」→「屋舗」

としか記載されていない以上、それ以上の「要素」を付け加える行為は、「学問に反する」と考えたからに他ならない。

しかしながら、「浄庵沼」の「定義」として「先行研究」（注 21）の成果を加味して、「再定義」し直したものが、

「浄庵沼≡（nearly equal）広大な沼沢地」

という解釈であった。

また、「広大な沼沢地」には、「先行研究」（注 21）で証明された「野中沼」や「新和沼」がかつて存在した地域が含まれるが、『斉藤来由』（注 1）に記載される「天正十八庚（原文は『甲』）寅（1590）六月」前後に、「野中沼」や「新和沼」が存在した根拠を示す事は困難なため、敢えて「広大な沼沢地」という表現に落ち着いた次第である。

結びにかえて

本稿において考察を重ねた主題は、江戸時代の最晩期に相当する元治元年（1864）8月23日に、白扇によって著された『斉藤来由』（注 1）に記載された「伝説」であった。

しかしながら、例え「伝説」をテーマに考察を行う際であっても、出典に記載されていない「要素」を付け加える行為は、「学問に反する」ことは言うまでもなく、厳に慎みたい。

最後に、本稿を記載し公表するに当たり、2025年5月22日の夕方に、越谷市西新井の「椿割塚」に赴き、435年前に亡くなられた故人のご冥福を祈念致した次第である。合掌。

注

- （1）白扇 元治元年（1864）8月23日『斉藤来由』（解読者 鈴木 秀俊（1991））
平成三年度 越谷市郷土研究会 古文書クラブ 学習会資料（書き下し文）pp. 31-36, 38-41
加藤 幸一（2016）平成 14 年度調査 平成 28 年 1 月改訂『荻島地区石仏』pp. 73, 74
- （2）大久保 知子（1985）「椿割塚と斉藤家について」第 17 回 越谷市民文化祭
- （3）（2005, 12, 10 建立）「椿割塚」西側の石碑」

本稿の発表時点では、刻まれた文字の「執筆者」は不明であるが、この「金石資料」により、経路「浄庵沼」→「浄庵堀」→「屋舗」の「説明」も、「新たに」なされるようになる。

- (4) 田村 のぶ子 (2006)「市内、西新井の「椿割り塚の由来」第 38 回 越谷市民文化祭

※故・田村 精之氏の原稿をもとに作成

瀧田 雅之氏の「聞き取り調査」により、

「もとの原稿」を作成された故・田村 精之氏の「隣人」による証言を得たが、その内容は、

①故・田村 精之氏は作成した原稿を「隣人」に見せた。

②故・田村 精之氏及び「隣人」の地元である越谷市西新井では、

「浄庵堀」を経て「屋舗」へ流着した」という言い伝えがいつの頃からか存在した。

- (5) 越谷市立図書館蔵「絵図の部 資料番号 20 明治期 蒲生・大戸間の河川と道路絵図」

(解説者 加藤 幸一・監修者 鈴木 秀俊 (年未詳))

「越谷市デジタルアーカイブ」

<https://adeac.jp/koshigaya-city-digital-archives/top/>

目録 ID mp081780-100041

番号 20 年号 明治期

表題 蒲生・大戸村間河川道路絵図

形状 一枚物

枚数 1 枚

大きさ 77.5×108 cm

所蔵機関 越谷市教育委員会 教育総務部 生涯学習課

権利関係・利用条件 CC BY(表示)

- (6) 秦野 秀明 (2018)「第 490 回 史跡めぐり 岩槻区南東部とベトナム寺院」配布資料 pp.10-12

https://koshigayahistory.org/180527_490th_s_m_.pdf

- (7) 秦野 秀明 (2022a)「明治期の「浄庵用水 (堀)」の流路」

https://koshigayahistory.org/220503_johanbori_h_h.pdf

- (8) 明治期の「浄庵用水（堀）」の流路の「定義」
荻嶋村地内字浄庵関（ママ）杵より下 西新井村地内字三ツ俣堰杵迄
浄庵堀通り ー 長千三百五拾八間（約 2,468.8m ※筆者加筆）
※「浄庵用水（堀）」の「初見」は、
白扇 元治元年（1864）8月23日『齊藤来由』（解読者 鈴木 秀俊（1991））
であり、以下のように記載されている。
（平成三年度 越谷市郷土研究会 古文書クラブ 学習会資料（書き下し文）p.33）
四世 会田甚五兵衛尉基親（もとちか）[以下略]
「[前略]西前用水二相用い候処、大用水より浄庵堀口に代地ヲ出し[後略]」
（太字・下線は筆者による加筆）
尚、四世 会田甚五兵衛尉基親（もとちか）の「戒名」は、本了院楽誉覚遊月心居士であり、
「没年」享保 11 午年（1726）11 月 24 日である。
つまり、「享保 11 年（1726）11 月 24 日」には、「浄庵堀」は存在していた。
※2023 年 9 月 30 日に、「ご位牌」を確認させて頂いた「西教院」ご住職様に感謝の意を表する。
- (9) 「今昔マップ on the web」
<https://ktgis.net/kjmapw/index.html>
- (10) 秦野 秀明（2022b）「浄庵用水（堀）」（令和 4 年度 第 53 回 越谷市民文化祭）
http://koshigayahistory.org/221116_johan_yohsui_h_h.pdf
- (11) 秦野 秀明（2023）明治期の「浄庵用水（堀）」と「三ヶ村用水路」の流路の復元」
https://koshigayahistory.org/230921_johan_sankason_h_h.pdf
- (12) 明治期の「三ヶ村用水路」の流路の「定義」
末田村地内字駒橋より下 小曾川村飛地浄庵堀落合迄
三ヶ村用水路 ー 長さ千八百拾貳間（約 3,294.2m ※筆者加筆）
- (13) 「農研機構農業環境研究部門 歴史的農業環境閲覧システム」
<https://habs.rad.naro.go.jp/>
- (14) 加藤 幸一（2025）「野島の浄山寺前の浄庵沼と浄庵用水」『荻島地区の歴史』

2025 年度郷土歴史講座「荻島地区の歴史」

-野島村・小曾川村・砂原村・荻島村・後谷村・西新井村・長島村- 配布資料 pp, 9, 10

- (15) 加藤 幸一 (2025) (注 14) 「9 頁左下」に挿入された「地図」における

「浄庵堰」の復元された位置について、

①2019 年 9 月 19 日の加藤 幸一氏から筆者宛てのメールの「添付図」

②2025 年 5 月 17 日の加藤 幸一 (2025) (注 14) における「草稿」

③2025 年 5 月 19 日の加藤 幸一 (2025) (注 14) における再度の「草稿」

において、「誤った位置」に記載されており、筆者の指摘で「修正」された。

尚、①②においては、

「浄庵堰」の位置が「三王セキ」の位置に記載された「誤り」があり、

「浄庵用水（堀）」の流路が「ウシロヤ分水」の流路上に記載された「誤り」があった。

- (16) 「嘉永 6 年 (1853) 「武州野嶋山之図」 (東京都立中央図書館 所蔵)」

題名 武州野嶋山之図 ブシュウノシマヤマノズ

作者等 法橋晃秀

写 出版年・書写年 嘉永 6 年 1853

年形状 一枚もの

件名 法橋晃秀

文庫名 東京誌料請求記号 015-C25/東 C015-C025

資料コード 4300328157

製作者 東京都立図書館画像の使用条件 パブリックドメイン

秦野 秀明 (2022)

「嘉永六年 (1853) 「武州野嶋山之図」 (東京都立中央図書館 所蔵)

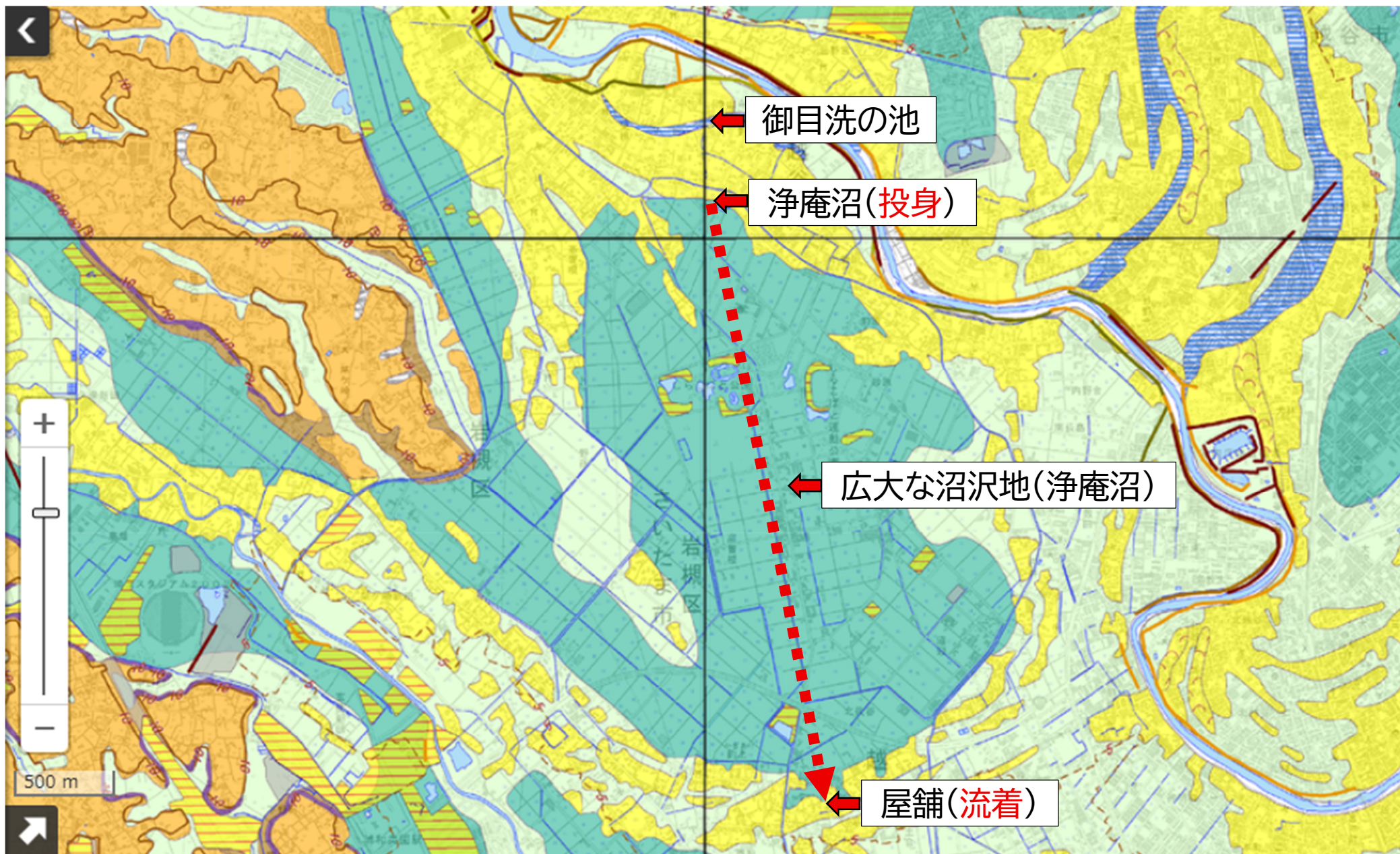
に描かれた「御目洗の池」と「行人」その他」

https://koshigayahistory.org/220827_noshimayamanozu_h_h.pdf

- (17) 「明治前期測量 二万分の一 フランス式彩色地図 -第一軍管地方二万分一迅速測図-

埼玉県武蔵国南埼玉郡大口村及黒谷村近傍村落」

- (18) 国土地理院＞土地の成り立ち・土地利用＞「治水地形分類図」
「地理院地図（電子国土 Web）」
<https://maps.gsi.go.jp/>
- (19) 平社 定夫（2024）
「河道・旧河道、クレバススプレー」『春日部市史 自然誌編』春日部市 p.18, p.34
- (20) a. 本間 清利（1975）
「第三節 越谷地域の用水」『越谷市史 第一巻 通史上』越谷市役所 pp.634-637
b. 越谷市史編さん委員会編（1972）『越谷市史 第四巻 史料二』越谷市役所 p.160
福井 猷貞（天保 11 年（1840））『大沢町古馬篋』
百四 ○須賀溜井之根元
「一 須賀村溜井之義ハ慶長年中新規溜井二相成、新方領筋分水堀敷等之田地潰地之為、代 米
壺石余岩槻領主 5 須賀村へ被下置候由及承知候、慶長已前ハ須賀溜井上 5 分水いたし、平野村
長宮村辺 5 別二用水路有之候様二承り申候、」
（太字・下線は筆者による加筆）
- (21) a. 中川水系調査事務所編（1955）
『中川流域の池沼跡地について -池沼分布とその干拓-』中川水系調査事務所 p.103
b. 新井 鎮久（1971）
「越谷地方における人間生活の場としての自然」『越谷市史研究報告』市史編さん室
pp.233-250
c. 新井 鎮久（1975）
「自然堤防の発達と池沼の形成」『越谷市史 第一巻 通史上』越谷市役所 pp.47-50
d. 堀口 萬吉（1993）
「低地の埋没と流路の変遷」『中川水系 I 総論・II 自然』埼玉県 pp.169-171



出典：「地理院地図(電子国土 Web)」 > 「治水地形分類図」
<https://maps.gsi.go.jp/>
より加筆して引用



出典：

「open hinata」

<https://kenzkenz.xsrv.jp/open-hinata/>

「迅速測図」（関東：明治初期～中期）」

より加筆して引用



出典：
「open hinata」
<https://kenzkenz.xsrv.jp/open-hinata/>
「治水地形分類図」（更新版(2007 年以降)）」
より加筆して引用